

寄稿

私と作業科学

介護老人保健施設 愛と結の街

村井 真由美

Mayumi Murai

(日本作業科学研究会理事)

高校3年生の冬、願書の受験学科を理学療法学科か作業療法学科に決めるときから私の作業療法探しの旅は始まった。散々悩んだが「創造的な」、「私にしかできないこと」がありそうな作業療法学科を○で囲んだ。その後、養成校や就職先では私の想像していた作業療法に出会えなかった。こんなものだろうと思う反面、この世界のどこかに本当の作業療法があると信じていた。そのため私は20代という時代にかなりのお金と労力を費やした。とても往生際が悪く、あきらめきれなかった。私のことを幸せの青い鳥を探すチルチル・ミチルだとか、モラトリアムだと言う人がいた。30代に突入する頃、作業科学を学ぶ機会を得た。今は自分なりに作業や作業療法について語る言葉を持ったし、作業療法実践という形にすることもできるようになった。しかし、まだまだ不十分で発展の余地が多くあると思う。結局、作業療法士の技とは作業療法の対象者(時には集団)をいかに作業的存在としてみるか、共にパートナーとして作業上の問題を解決し、対象者が望む生活を創ることができるかに尽きると思う。そのためには「作業」の知識ほど私の力となったことはない。その作業がどうしたらうまくできるかということ悩みながら勉強してきた時代の知識が生きてきたし、遂行要素に関する文献の内容が結びつくようになった。

どのように作業の勉強をしたかというところ最初は独学で文献を読んだ。その頃は全く自分に浸透しなかった。本格的に浸透し始めたのは札幌医科大学大学院で「作業科学—作業的存在としての人間の研究—」¹⁾を授業で学習し、Zemke教授、故・佐藤教授、大学院の仲間たちとディスカッションした時からだと思う。それでも最初は実践とどのように結びつくかはよくわからなかった。私が出会うクライアントは本当に作業的存在なのか、とおぼろげに思っていた。ただひたすらに大学院で学習したが、知らないうちに自分の中に作業の

知識が積み重なっていたようだ。ほんの一例だが、生活の中の作業は全て一つ一つ行うのではなく複数の作業を同時に行っていることがあるということ、ある作業の前後の作業とその関係、一つの作業が個人や状況によって意味合いが変わること、などである。作業科学を学ぶ前はクライアントに何をしてもらおう、何を提供しよう、ということばかり考えていたが今は線で考えるようになった。その線は1日の生活であったり、過去—現在—未来の線であったりする。博士論文作成の過程で抱いていた研究疑問がインフォーマントの言葉や作業をする様子から答えが見いだせたり、思いもよらなかった現象に出会うことができたのも作業について学ぶ貴重な機会であった。

2003年に現在の職場に勤めたときは何としてでも作業の知識を実践で試してみたかった。先に理学療法士がいたので彼らの前で徒手的な関節可動域訓練などをしたくなかった。作業の専門家でありたかった。ここでも往生際が悪かった。絶対理想の作業療法ができると思っていた。最初の半年は本当につらかった。今となっては良く覚えていないけれど無我夢中でやったおかげで今は作業療法をしているという実感を持てるし、同僚たちからも認識されるようになったと思う。養成校で学んだように作業の段階付けや目標達成ができるようになった。作業科学を学ぶ前はimpairment, body functionの改善や維持を目的としていたから段階付けも終わりもなかった。クライアントの生活に変化がなかった。作業に焦点を当てた介入によってクライアントの生活が変わるのがわかった。

ひとり奮闘しているうちに縁あって作業に焦点を当てた本当の作業療法をしようというあるコミュニティに出会った。彼・彼女らは作業科学セミナーに参加したり、自分の職場の作業療法に違和感を覚え、共感した仲間内で勉強しているという。そして自分の担当したクライアントに作業に焦点を当てた介入をした事例

研究をしている。その勉強会に参加させていただいたが非常に衝撃を得た。そこには作業療法の技があった。作業療法がScienceであるのと同時にArtであるのはこのことだと思った。技を発揮するには作業の知識が不可欠だと再認識した。そして、私が大学院で感じたように作業について語り合うコミュニティが必要であると感じた。ひとりでも学習でき、素晴らしい作業療法ができる人がいるだろう。やはり作業について語り、深めていけるコミュニティがあった方がいいと思う。1年に1回の作業科学セミナーはその機会であると思う。

前述したが、私の作業療法は発展途上である。私の職場に来られる全ての利用者に最善の作業療法ができているわけではない。力不足に悩むことの方が多い。もちろん現在私が持っている作業の知識だけでは足りないと思っている。作業科学がこの世に誕生してまだ十数年である。Journal of Occupational Science, American Journal of Occupational Therapy, Canadian Journal of Occupational Therapyを愛読しているがどんどん新しい作業の知識が産み出されている。毎年楽しみにしている作業科学セミナーではまだまだ作業についてわかっていない自分を実感させられ、打ちのめされる。果てがないからこそ新しい知識に出会えることは楽しみである。

現在、実践現場で働いて新しい作業の知識のヒントに出会う。なかなか研究に費やす時間を確保できないができる範囲で形にしたいと考えている。現在関心があることは「作業が始まる時」である。クライアントを評価した際に作業ニーズを汲み上げることができないことがある。今までは自分の力不足だと思っていたが、いろんな方との対話の中で「作業が始まる時」があるのではないかと思うようになった。人は状況によって作業をしたくない時があるかも知れない。しかし、機が熟する時があるような気がする。そのサインを作業療法士が捉え、作業ができるように手はずを整えることができるのか。それには作業の知識が不可欠だと思う。機が熟する時までに何をするか。クライアントのニーズ通り作業に焦点が当たっていないことでもするのか、何もできなくてもひたすら作業に焦点を当てた話をするか、答えはまだ見いだせない。他にも未だ知り得ない作業の知識が数多く埋蔵されているように感じる。

私は作業の知識を得ることで作業療法が何かを言葉や実践に表せることができるようになった。迷い悩んでいる作業療法士がいたらその方にも作業の知識が役

立つかも知れないと思う。私の願いは作業療法士がどのような職種か世間一般に認識されることである。何も難しいことはないと思う。作業療法士は作業の専門家なのである。それには作業療法士が作業について語る言語を持ち、実践で示すことが必要であると考え。作業科学セミナーや機関誌「作業科学研究」がその場の一つであることを切に願うし、私なりに尽力したいと思う。

文 献

- 1) Clark F, et al (著), 佐藤剛 (監訳) : 作業科学—作業的存在としての人間の研究。三輪書店, 2000.